



170号
2012/1/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp
◆‘わんりい’事務局の住所表記が上記になりました。

新年あけましておめでとうございます



黄土高原、サンワー村のお嫁入り 2005年1月

撮影:馮奮
feng fen

‘わんりい’ 170号の主な目次

北京雑感(61)北京の大きさ	2
私の調べた諺・慣用句(6)「三顧の礼」	3
媛媛讲故事(40)怪異シリーズ⑨「鬼の話・二題」	4
読む(83)「この国のかたち II」	6
フィールドノートの走り書き⑫ 「お正月様」と「きりこ」・南三陸町と気仙沼の正月飾り	7
四姑娘山写真だより(25)「花の写真の撮影ポイント」	10
中国-城市めぐり(12) 張家界市、そして武陵源	12
スリランカ紹介(54)植物園その1・スパイスガーデン	15
アフリカの日々(59)「楽しき通勤地獄」	16
松本杏花さんの俳句集「千里同風」より	17
私の四川省一人旅(52)草原の中の街・塔公Ⅱ	18
‘わんりい’活動報告・「つなげよう 広げよう…」	20
アンケート自由感想と集計結果	21
留学生のスピーチ原稿/劉麗那・顧傑・朱晏璐	22
‘わんりい’掲示板	24

【表紙写真説明】

普段は街で暮らす子どもや若者たちが村に戻る春節は、結婚式シーズンでもあります。黄土高原の伝統的な婚礼は三日間行われ、二日目の早朝に新郎家は新郎と親戚の代表からなる「迎親隊」を組み花嫁を迎えに行きます。一行が新婦宅に着いて双方の贈り物の授受が済むと、新婦はようやく花嫁衣装に着替え開始。最近では結婚式のビデオ撮影を依頼するカップルがほとんどで、出張ヘアメイクさんが新婦を花嫁に変身させる間、新郎が付き添うラブな光景を撮るのがお決まりのシーンです。

花嫁宅での招待客を交えた食事会の後、花嫁は兄嫁や叔母に付き添われて迎親隊とともに新郎家に向けて出発。今は車移動ですが、サンワー村では古式に則り、花嫁は村に着く手前で驃馬ヤンガに乗り替えます。村人総出の秧歌隊が歌い踊る中、ゆっくりと坂を上り来る花嫁行列の一行。祭のような賑わいの中、花嫁は村の一員として迎え入れられるのです。かつては簡素化されていた婚礼ですが、近年はむしろ伝統的で華やかな結婚式を望む若者も増えているそうです。

(丹羽朋子 中国民間芸術研究に従事)

ものの本に依ると、中国の国土は日本の26倍だそうですね。26倍と言われても、どれほどの違いがあるのか、あまりピンと来ません。世界地図を広げて見ると、ユーラシア大陸を描いた筆の余滴がこぼれたように、大陸に沿って描かれている日本列島と、その大陸のかなり奥深くまで同じ色で塗られた中国領土とでは、大きさの差は歴然としていますが、余り実感は伴いません。

中国に行って、一番初めにその違いを感じたのは道路の広さです。空港から市内への高速道路や新しく建設した主要道路は片側3車線も4車線もあるものが多いので、広く感じるのは当然でしょうが、従来からあるような2車線、或いは1車線の道でさえ日本の道路より広く感じるの不思議に思いましたが、よく見ているうちにその秘密が分りました。歩道が広いのです。正確な数字は分かりませんが、東京の歩道の2倍はありそうです。

東京でも再開発の進んだ都心では歩道が随分広くなったようですが、北京の歩道はもっと広いように感じました。そして、もう一つ道路が広いと感じる理由がありました。それは、殆どの建物が道路から離れて建っているのです。道路の両脇の建物が道端から離れているので、道路を車で走っても、歩道を歩いても道が広々として開放的な気分になるのです。

この広い歩道や建物へのアプローチは、車が多くなるに連れて駐車場として利用されることが多くなり、初めのうちは歩道の上に自動車が無秩序に駐車していて驚きましたけれど、広いのでそう邪魔には感じませんでした。そのうちに正式な有料駐車場になって、料金を徴収する係員が受け持ちを決めて働きはじめました。以前からあった自転車置き場が減って、自動車の駐車場が増えていきました。

街の景観としてはちょっと乱れましたが、道路を利用する歩行者の目には余り障らず、伸びやかな雰囲気は保たれました。通行する者には圧迫感が無いので道路は実際の広さよりも広く感じます。東京の首都高速が、両側から防音壁が迫ってきているので閉塞感を強く感じ、道幅を狭く感じるのとちょうど反対の現象です。

高速道路といえば、北京のジャンクション部分は大きなスペースでゆったりとカーブしているので、運転し易そうです。土地が全て国有なので、用地買収などの面倒がないので出来ること、と言ってしまうとそれまでですが、同じ条件で建設するとしても、日本なら、土地がもっ

たいないからもっと小回りで効率的なジャンクションにしようと考えてでしょう。こんな所にも、中国の土地の広さを感じます。

また、身近で中国が広いと実感したのは公園です。北京は意外と公園の多い街です。北海公園、天壇公園、頤和園、香山公園等等、観光コースに入っている公園の他にも沢山の公園があります。そしてその広さが、東京の公園とは比較にならない位大きいのです。そして公園には必ずと言って良いほど大きな池があります。その池の大きさが又半端ではないのです。北京に行かれた皆さんは、北京の真中にある北海公園ペイハイという、湖のような池を中心とした公園に驚かれたと思います。街の中心部にあんな大きな水辺があることは何とも不思議な気がします。しかし実際には、北海ほどではないけれど、あれにかなり近い規模の池を持った公園がいっぱいあるのです。例えば、北京西駅のすぐ近くに蓮花池公園リエンホアチーがあります。また、私が住んでいた家の近くスージュールに紫竹院公園というのがあって、ここも蓮花池に負けない大きな池を中心にした公園です。東京にも素敵な公園が沢山ありますが、その数と規模を比べてみると、どちらも北京の公園に軍配が上がります。

もう一つ、中国の大きさを実感したのは、家の近くのスーパーマーケットでのことです。フランスのスーパーマーケット、カルフルが中国語で家樂福ジャルフと称して北京でも開業すると、瞬く間に、店舗を増やしていきました。地上の建物は余り大きく無いのに、地下に降りると地上の何倍も広いのです。確認したわけではありませんが、北京の地階は、上に立つ建物の下だけでなく、道路からのアプローチの部分やバックヤードの下にも広がっていたり、若しかしたら隣のビルの地階と繋げることも可能なのかも知れません。兎に角思いもよらぬ広さの売り場に、夥しい数の商品が並び、ウィークデーの午後でも、大勢の人が買い物に訪れていました。

カルフルは、日本でのビジネスには失敗して、多くの店舗を閉鎖しましたが、中国では大成功しました。買い物客は、アメリカ式の大きなカートに品物をいっぱい積んでレジに並びます。レジはずらっと30箇所ほどもあるのですが、それぞれに20～30人が並び、日曜日などは、レジを通過するのに30～40分かかりました。この時には、中国は土地が広いばかりではなく、人口も多いのだと再確認しました。

多少古い話になりますが、民主党の菅首相が、自民党に籍を置いていた与謝野馨氏を閣内に迎え入れた時に、「私は与謝野さんを“三顧の礼”を以ってお迎え致しました。」との談話が新聞やTVで報道されました。

このように、これぞと思った相手のところに何度も足を運び、頭を低くして是非自分の陣営に来て力を貸して欲しいと頼み込む場面は、何も政治の世界ばかりでなく、産業界、スポーツ界、医療界等々、また私達の身近な範囲でも見られ、“三顧の礼”は大変良く使われる慣用句だと思います。三国志ファンの皆さんは今更の感がある

かも知れませんが、今回はこの慣用句の謂れです。

▲三省堂 現代国語辞典は、「三顧の礼 (目上の方が) 人に仕事をしてもらうために、何回も訪問して礼儀をつくして たのむこと」

▲小学館 中日辞典には、「三顧茅廬 (sān gù máo lú) 三顧の礼をとる。礼を尽くして人を迎えるたとえ。蜀の劉備が諸葛亮¹⁾の庵を三度訪ね、ついに彼を軍師に招聘することができたという故事から」

この成語の出自は三国蜀漢時代の諸葛亮の〈出師表²⁾〉の、「先帝不以臣卑鄙，猥自枉屈，三顧臣于草廬之中……」の部分です。意識としては、「先帝(劉備のこと)は私(諸葛亮のこと)を卑しい者とは見ずに、自らへりくだって三度も自分の草庵に……」

といった感じでしょうか。

東漢の末年に劉備は曹操と戦って敗れ荊州³⁾の劉表のもとに身を寄せていました。劉備は何としても漢王朝の再興が実現出来るようにと、四方八方に人材を求め、賢人を募集しました。

荊州の名士の司馬徽が劉備に“眠れる龍”と言われる諸葛亮を推挙しました。諸葛亮は襄陽市の西二十里の隆中というところで草庵に住み、自給自足の暮らしをしていました。

彼は学識も大変深く且つ広くて歴史も詳しく研究しており、まさに傑出した人材でありました。劉備はそのことを知ってから、隆中に合計三回も諸葛亮を訪ねました。初めの二度は

諸葛亮は劉備に会おうとはしなかったのですが、三度目に遂に自ら劉備を出迎えたのです。

諸葛亮は劉備と天下の形成を分析し、時局を検討して、如何に政権を奪取し、天下を統一できるかとの対策を話し合いました。そこで諸葛亮が提言したのが“天下三分の計”⁴⁾です。

劉備は諸葛亮の炯眼^{けいがん}に大変敬服し、彼に是非山を下りて自分のところへ来て頂き、漢王朝の再興に力を貸して欲しいと頼み込みました。諸葛亮も劉備の三顧の礼に心を動かされ、山を出ての劉備の天下奪取の手伝いを承諾しました。

劉備は諸葛亮の「天下三分の計」の提言を受け入れ、周囲の国々を奪取し、あるいは同盟を結び、最終的に蜀の建国に成功したのです。

〈注記〉

- 1) 諸葛亮^{りやうこうめい}：中国後漢末期から三国時代の蜀漢の政治家・軍人。字は孔明。蜀漢の建国者である劉備の創業を助け、その子の劉禪の丞相としてよく補佐した。伏龍、臥龍とも呼ばれる。
- 2) 出師表^{すいしのひょう}：臣下が出陣する際に君主に奉る文書。「出師」とは文字通り「師(=軍隊)を出す」ことであり、「表」とは公開される上奏文を指す。
- 3) 荊州：河北省・湖南省、および河南省・広東省・広西チワン族自治区の一部
- 4) 天下三分の計：当時安定した根拠地を持たなかった劉備に対し、諸葛亮が曹操(後の魏)・孫権(後の呉)に対抗する為には、四川省(後の蜀)地方に侵攻し根拠地とする事が必要だと提言した事。



イラスト：叶霖 (Ye Lin)

◆ 其の一・騙された鬼^{注1)}

河南省の南陽地方に宋定伯という人がいました。彼が若い頃の話です。或る日出掛けて帰りが大変遅くなりました。夜道を歩いていますと、鬼に出会いました。宋定伯は怖ろしさに震えながら勇気を出して訊ねました。

「あなた、何者ですか？」

鬼は「私は鬼です」と答え、今度は鬼が訊き返しました。

「あなたは誰ですか？」

宋定伯は、いくら怖がってもどうしようもない。それなら思い切って鬼と付き合ってみようと次のように答えました。

「私も鬼ですよ」

鬼は又訊きました。

「どこへ行かれるんですか？」

「宛^{えん}県^{注2)}の市場へ行こうと思っています」

「私もそこに行こうと思っていたところです。では、ご一緒に行きましょう」と鬼が言いました。

宋定伯は臍^{ほぞ}を決めて鬼と同行しました。

二人が何里^{注3)}か歩いた頃、鬼が言いました。

「このままずっと歩いたら、疲れてしまいます。それよりお互い交代で負(お)ぶさりあった方が楽かもしれないですね。いかがですか？」

宋定伯は

「それはいい考えですね」

と同意しました。そして鬼がまず宋定伯を負(お)ぶり何里かを歩くと、鬼が、

「あなたは随分重いですねえ。本当に鬼ですか」と疑っているように言いました。

宋定伯は

「私は死んでまだ間もないのですよ。だから重いのでしょう」

次に宋定伯が鬼を負(お)ぶる番になりました。鬼はふわふわと軽く大変楽でした。

このように二人は何回も順番に負(お)ぶり合いなが

ら歩きました。

宋定伯は何かよい策があれば鬼から逃れることができるかもしれないと思い、試みに鬼にいろいろ質問してみました。

「私は新鬼ですので、鬼の生活の経験がありません。分からないことが沢山あるので教えてくださいませんか。まずお伺いしたいのは、鬼は、何が一番怖いのですか？」

鬼は「人間の唾が大嫌いです」と教え、宋定伯はそれを頭に入れました。

またしばらく歩き続けていますと、目の前を川が流れています。宋定伯は鬼を先に渡らせました。鬼は体が軽いので、水の音を全く立てないで川を渡って行きましたが、宋定伯が渡るとザブザブと水の音がしました。

鬼は不思議に思って

「あなたが川を渡ると、どうして水の音がするのですか」

と訊きました。宋定伯は

「死んでから川を渡るのは初めてなんですよ。まだ水に慣れていないのです。仕方ないでしょう」

と答えました。

とうとう市場が目の前のところまで来ました。宋定伯は鬼を背中にしっかり背負って一目散に道を急ぎました。鬼は宋定伯の背中で「下ろしてくれ、下ろしてくれ！」と「わあわあ」わめきましたが、宋定伯は応ぜずに市場に向かって走り続けました。間もなく市場に着いて宋定伯が鬼を下ろすと、鬼は忽ち一匹の羊に変わりました。

宋定伯はその羊を売ってお金にしたいと思いました。ただ鬼がまた何かになると困ると心配して、鬼に向かって唾を吐きましたので、鬼は縮み上がったもう他のものには変わることができませんでした。宋定伯は安心し市場で羊を売って千五百元のお金を得て市場を去って行きました。

その後、「宋定伯は鬼を売って、千五百元を儲けた」という噂が広がったということです。

◆其二・新鬼と旧鬼

死んで間もない新鬼がいました。食べ物を上手に見つけられなくて、いつもお腹をぺこぺこに空かせていて痩せ細り、憔悴した姿をしていました。ある日、いつものように食べるものを探してふらふらと歩いていますと他の鬼に出会いました。よく見ると、なんと、それは生前の友たちで、既に死んで二十年にもなる旧鬼でした。旧鬼は新鬼と姿がまったく異なり、太って、元気そうです。二人は挨拶を交わしてから、旧鬼が不思議そうに新鬼に訊ねました。

「あなた、どうしてこんなに痩せ細っているのですか？」

新鬼は

「食べ物がなかなか見つけられなくて、いつもお腹を空かせています。あなたはきっと色々な経験がおありでしょう。食べ物はどうやって探せばよいのでしょうか？」

と旧鬼に教を乞いました。旧鬼は

「そんなことは難しいことではありませんよ。人間の前で少し悪戯をするだけで、必ず怖がってすぐ食べ物を出してくれますよ」

新鬼は旧鬼の言うとおりに行動を始めました。彼はある大きな村に行くと、家の東側にある庭に入りました。その家は仏教を真剣に信じている家でした。この庭の西の部屋に石臼が置いてあるのが見えたので、新鬼はその石臼を使ってこの家の人を驚かそうと思い、生きている人間のように石臼を回し始めました。ところが、この家の人たちは石臼がひとりで回っているというのに全然怖がるふうもなく、不思議がりもしません。

この家の主人は家族に言いました。

「ご覧。石臼がひとりで動いているよ。仏様は我が家の貧乏さがげんを憐れんで、鬼に石臼を挽かせてくれているんでしょう。仏様のご厚意に甘えてもっと麦を挽いて貰いましょう」

そして沢山の麦を運んで来て鬼に挽かせました。鬼は、その内食べ物を運んで来てくれるでしょうと期待していたのですが、夕方まで数斛^{注4)}の麦を挽きましたが食べ物を運んでくる気配は一向にありませんでした。鬼は失望し、すっかり疲れ切って

その家を離れました。

新鬼はとても腹を立て、旧鬼を罵りました。

「あなたはどうして私を騙したのですか？」

旧鬼は

「一回位うまく行かないからといって怒るものではないですよ。もう一度試してみてください。今度はきっと何か貰えますよ」

新鬼は再び出かけました。今度は村の西にある家に行きました。この家は、道教を信じる家です。この家の玄関に臼があり、新鬼は杵を持ち上げ人間のように臼をつき始めました。しかし、この家の人も少しも驚いた様子がなかったのです。この家の人はこのように言いました。

「鬼が臼をついているのよ。この鬼は、昨日村の東の家に行って麦挽きの手伝いをしていたと聞いたけれど、今日は我が家を助けに来てくれたのでしょうか。早く粟を持って来てください。ご厚意に甘えて搗いて貰いましょう」

すると、粟が運ばれて来、下女もふるいを持って手伝いに来ました。新鬼は働きながら食べ物を待っていましたが、仕事が終わって、疲れきっても、結局何も与えてくれませんでした。

新鬼は大変不満に思って、大きな声で旧鬼に詰め寄りました。

「私とあなたは昔の友たちでもあり、親戚関係でもあったのに、どうして何度も私を騙すのですか？二日間人の家で手伝ってみましたが、ご飯一杯も貰うことが出来ませんでした」

旧鬼は

「あなたは運が悪いですね。あの二軒は、仏教や道教を深く信じているのですから、怖いものは何もないのです。だから脅かすのは難しいですよ。この次は普通の家に行って少し驚かせてみてください。必ず食べ物を貰える筈ですよ」

と勧めました。

新鬼はお腹が空いて仕方ありませんので、旧鬼が勧める通りに試してみるしかないと考えて、再び出かけ、一軒の家の前に来ました。ここは旧鬼の言う普通の家かなと新鬼は考えながら、奥へ進んで行きました。見ると、庭で何人かの若い女性たちが食卓を囲んで食事をしており、ほかには白い犬が一

匹いるだけでした。

この犬を操って女性たちを驚かせてみようと新鬼は考えました。そこで、犬を抱え上げ、宙に浮いたまま歩き回らせました。この家の人たちはこれまで犬が宙に浮いたまま歩き回るなどというような事は聞いたことも見た事もなかったので、腰を抜かさんばかりに吃驚し、大騒ぎになりました。そして占い師を呼んで来て占ってもらいました。占い師は次のように言いました。

「食べ物が欲しいお客さんが来ていますよ。犬を殺して料理し、その他、美味しいご飯や果物、それにお酒なども用意して庭で祀ってください。そうすれば、もう怪しいことを起こさないでしょう」

この家の人、占い師の言う通りにしました。新鬼は遂にいろいろな食べ物を手に入れました。そ

の後も、新鬼はお腹がすくと悪戯(いたずら)をして人々を驚かせては、食べ物を手に入れることができるようになりました。本当に旧鬼が教えてくれた通りでした。

●注釈

- 1) 鬼：中国の鬼は、死者の霊魂、亡霊、幽霊のことをいう。鬼の姿や性格は、人間の想像によって、様々に変わるが基本的には、ふわふわ軽く、暗闇で活動し、ときに優しく、ときには怖ろしい姿にもなり、その時々に応じて千変万化の力を発揮する。
- 2) 宛^{えん}：旧い地名、河南省南陽市の近く。
- 3) 里^り：古い距離の単位、一里は0.5km。
- 4) 斛^{こく}：昔の容量を量る器、最初は一斛の容量は十斗だったが、のちに五斗に変わった。

読む(83)

この国のかたち(二)

司馬遼太郎著
文春文庫

もうすぐ今年も終わる。毎年、紅白歌合戦後の真夜中の年明けに、神社へ向かうのだが、神社では甘酒とお汁粉を用意してくれている。

ちなみに、著者によれば、人が神社に手を合わすと、現世利益よりも、「齋き祀られた厳くしいものに対して畏敬を感じるという気分がつよい」。例として、ポンペ神社を挙げる。

これは、ある医師の生家にある神社である。ポンペは江戸幕府から招聘されたオランダ人で、その医師の祖父が教えを受けた人である。祖父は、「ポンペ先生の恩は忘れられないとして、庭に一祠をたてて」朝夕拝んだという(ちなみに、ポンペ自身はクリスチャンで、この神社のことを知れば、「目をまるくしたにちがいない」と氏は結んでいる)。「特定の山や場所、樹木などを聖なるものとして敬した」ことが、古神道だった。

これに対して、仏教は「解脱だけを目的としている」。氏によれば、「解脱とは煩惱から解き放たれることで、本来の仏教というのは、極端に言えば解脱の必要と、そのための多少の方法しか説いていない」。ただ、普通の人間には、解脱はなかなかできることではな

く、それではいっそ解脱した人を拝んでしまえ、というところから、大乘仏教が生まれ、仏教に救済という現世利益が入ってくる。

さらに、キリスト教は、「いきなり神がわれわれを救ってくださる」救済の宗教だという。キリスト教は、1549年にフランシスコ・ザヴィエルによって日本に伝わった。

ザヴィエルは、スペイン領のバスク人で、顔が東洋系にやや近かったという。「ザヴィエルがバスクという少数民族の容貌・体型をもっていたことが、当時、かれをみた日本人たちにとっていっそう親しみを深くした」と氏は述べている。意外なキリスト教伝来の裏話だ。

当時の日本は戦国期で、「個人個人が自分の生死をきめ、自分の宗教観を、自分の手でもとめざるをえなかった時代」だった。いわば「日本史の青春のころ」にキリスト教は伝来したのである。

クリスマスを祝い、年越しの鐘を聴き、神社に初詣するこの時期、すべての神様に、1年無事に過ごせたことを感謝したい。

(真中智子)



2011年末、テレビでは3.11の被災地と他の地域
の間に徐々に現れ始めた温度差を埋め、記憶の風化
を食い止めようと、震災関連の映像が繰り返し流れ
ていました。

あまりに多くの命が奪われ、長い時間をかけて築
き上げてきた暮らしの基盤が跡形なく失われたあ
の日から早10ヵ月。私達日本人はこの経験から何
を学び、いかにして明日への希望を見出すことが
できるか？ 日々この問いに向き合うことは、私達に課
された重く大切な宿題だと思います。そこで新年第
一回目は番外編として、去年の師走に訪れた宮城県
の南三陸町と気仙沼の切り紙細工をめぐる見聞記
をお届けします。

🍡 「お正月さま」、**“仮設”** に来たる

12月18日、気仙沼の琴平神社はお正月準備の真っ
最中。種類ごとに箱詰めされたたくさんの「お正月さま」
や「きりこ」が、氏子さんに配られるのを待っていた。

「お正月さま」とは宮城県一帯でまつられる、大年神、
五穀の神、恵比寿や釜神様等の御神像のこと。「きりこ」
は縁起物をかたどった切り紙の正月飾りで、半分に折っ
た紙に供物や吉祥図柄を切り出す「切り透かし」、複雑な
切れ込みを入れた立体的なもの(「網型」等と呼ばれる)、
幣束など多彩な形式がある。

この地域の昔ながらの家屋には二間もある立派な神
棚があり、神社からのお札やお正月飾りの他にも、注連
縄しめなわや「ほしの玉」と呼ばれる縁起物の絵が、大漁や豊作
を願って賑やかに飾られる。宮城の伝承切り紙の見事
さは以前から聞きかじっていたが、現地を訪れる以前、
震災後初めて迎えるお正月を前に「あんな手間がかか

るもの、現地ではそれど
ころではないのではないか
…」と、私は勝手に想像し
ていた。

気仙沼湾の入り口に突
き出た岬、岩井崎に立つ琴
平神社は、創建1635年
の古い神社だ。3月11日、
神社の周囲の集落が大津
波に呑まれたにもかかわ
らず、水は神社の境内へ上
がってお宮の前で止まっ
たという。震災直後しば
らくは周囲の住民たちが
社務所に避難していたそう

だ。震災前まで400軒あ
った氏子さんのうち300軒
が津波で流され、今は残っ
た60軒ほど以外はほうぼ
うの仮設住宅や他所に移っ
ている。今年は宮城県神社
庁が仮設住宅用に壁掛け型
の小型神棚や通常の半分サ
イズの御神像を用意し、各
神社の神職さん達が仮設
住宅をまわって住人達に無
料頒布しているとのこと、
今年もきちんとお正月の
神様の扱代が用意された
と聞いて、正直驚いた。

宮司の清原正臣さんによ
れば、切り紙の「お飾り」
の風習がいつ頃はじまった
かは不明だが、昔は紙が貴
重だったので昭和20～30
年頃までは各家が障子紙を
神社に持参してその場で必
要な分を宮司さんに切って
もらっていた。今は琴平神
社では7種類の「切り透かし」
と1種類の「網型」、各種
の御幣束をあらかじめ用意

する。「切り透かし」(10
枚重ねで切る)は切るのに
約50分、立体的な網型は
なんと1枚に2時間もかかる
ため1日に1、2枚、多く
て3枚作るのが限度。「ほ
ぼ毎晩ね、日課のようすわ
。昔、親父のときは氏子
も250軒ほどだったし、網
型は30人ほどの役員さん
だけにお歳暮代わりに切っ
て配っていたんです。」今
は約500軒分を宮司さん一
人で切るため、お正月が明
けるとすぐに来年の準備を
始め、一年かけてなんとか
切り終わっていたそうだ。

3.11以降、琴平神社も
当然、切り紙どころでは
なかった。「お盆過ぎにな
って、やっぱり今年も切



琴平神社では、愛嬌たっぷりの
狛犬がお出迎え



神棚の例(宮城の正月飾り刊行会編『祈りのかたち・宮城の正月飾り』より)

ろうと思ったんです。目標の200軒分には届きませんが、なんとか100軒分を間に合わせました。」仮設住宅での頒布を終えてちょうど戻って来られたという息子さんの、凛々しいご装束姿が印象的だった。

周囲の家が壊滅し、砕けた墓石が無残に散在する海辺にあって、ぽつんと不思議なくらい変わりなく残る琴平神社。神社の神様と宮司さん一家はこの場所で、近い将来、きっと帰ってくるだろう氏子さんたちを待ちながら、その暮らしを見守っている。神社が大きな木の根のように見えた。

✂️「きりこ通りプロジェクト」

わたしが三陸の「きりこ」に興味をもったきっかけは、2010年のアートプロジェクト「生きる博覧会」で行われた「きりこ通りプロジェクト」だった。

外から来た若いお嫁さんたちを中心とする南三陸町在住の女性たち有志が、志津川駅から海へと続く沿道の家々を一軒一軒訪ね歩き、大切な思い出、宝物、歴史などを聞き取りして、それを元にその家々オリジナルの「きりこ」を作成する活動だ。

夏の青空の下、沿道に吊るされた500枚ものきりこが街の人々や観光客の目を楽しませた。だが震災で、この地域の情緒ある佇まいは一変、一面の瓦礫と化す。プロジェクト参加者の多くも被災し、住む家を失ったという。

昨年6月に東京でプロジェクトの中心メンバーの方々とお会いした時、「南三陸の歴史を再発見し、人々の人生に共感しながら、作業をすすめた半年前のあの活



「ケーキとお酒とバス停の不思議な柄はお菓子屋の雄新堂さんのきりこ。隣の酒屋で一杯飲んだお父さんがバスを待つ間家族のためにケーキのおみやげを買いやすいように、開店以来いくつかのケーキを200円のまま値上げしていないのだそうです。(阿部英恵作。)

(写真・文章：「生きる博覧会」ウェブサイトより)

動が、まさかこれほど貴重な町の記憶の記録になろうとは思ってもよらなかった」と涙ながらに話された。2011年夏のお盆のイベントでは同プロジェクトの音頭で、仮設役場横の広場に全国から寄せられた何百枚もの「きりこ」を並べた「きりこ回廊」が作られた。《南三陸の海に思いを届けよう》と題した追悼集会も行われ、ネット中継された。きらきらと波が光る、あまりにも美しく穏やかな夏の海。「あの日から初めてこんなに海に近づいた」と言いながら、いつまでも海をながめる女性たちの後ろ姿が今も鮮明に思い出される。

✂️きりこ揺れ、「神様、ああ、来たのかな」

「自分たちは昭和35年のチリ地震津波のあとに生れた世代で、津波がきたら高い所に逃げろとは聞いていましたが、ここに50年周期くらいで大津波がきていたとは全然知らなかった。チリ津波の時は自宅まで津波は届かず近所の60人ほどの避難者を受け入れたそうので、だから義母さんは今回の津波でも“ここは大丈夫だから”って動こうとしなかった。妻が無理やり一緒に逃げて助かったんですけど。」南三陸町の志津川地区の高台に建つ上山八幡宮。神職の工藤庄悦さん一家はあの日、雪降る中、神社の上の山を越えて近くの小学校に避難し、一命をつないだ。眼下の自宅は津波に飲み込まれた。被災後は数か所の避難所を転々としたのち、今は隣市の仮設住宅に住みながら、毎日この神社まで通っている。宮司である義父の祐允すけよしさんは、「4月に二次避難所に移る時、“神社と俺たちを置いていくのか”と言われてねえ。秋祭りには帰ってくると心に誓っての苦渋の決断でした」と話す。

上山八幡宮の「きりこ」は、4種類の「切り透かし」(三方さんぽうにのった御神酒、餅、宝袋等の供物の図案)と、「恵比寿の幣」と呼ばれる網から鯛や扇が垂れ下がる立体的な切り紙細工を主とする。「わたしのところのお飾りは、県内で一番簡単だと思いますよ。シンプル イズ ビューティフルですね」と宮司の祐允さんは笑うが、私はこの神社のきりこはおおらかなラインがなんとも愛らしく、洗練度ピカイチの図案だと思っている。

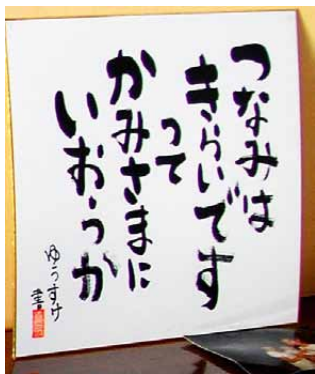
切り透かしには厚紙の型紙があるが、恵比寿の幣は宮司さんはフリーハンドで切る。切り始めて何年も経っていない娘婿の庄悦さんは口伝で教えられた図柄を独自に設計図におこし、手本にしているという。庄悦さんは震災前、昼間は実家のお菓子屋さんで働き、帰宅後に夜鍋できりこを切っていた。通年は御幣束なども合わせて合計4000枚くらいを作るが、氏子の多く



「恵比寿の幣」をひろげる工藤庄悦さんと、右図は宝袋をかたどった「切り透かし」

が被災した今年は9月から切り始め、1600枚を用意したという。

机の上にあった11月7日付の新聞記事には神職として苦悩する庄悦さんの言葉があった。「地鎮祭もなにもかも無意味だったのかと…。津波に町がのまれたのは自分のせいだと思うことができました。」しかし10月、同じ仮設の住人から子どもの七五三を依頼され、励まされたという。



庄悦さんの奥さま真弓さんが幼い息子、由祐くんが綴った「五行歌」

記事がきっかけで全国から支援の晴れ着が届き、今年は七人の子どもたちと庄悦さんの4歳の息子の由祐くんが、上山八幡宮で七五三を迎えた。9月には延べ千人ものボランティア達の尽力で瓦礫が取り除かれ、神社の敷地で恒例の御神楽も奉納された。私達が訪れた翌日から1週間は用



「グラウンド・ゼロ」となった志津川の街並みを見下ろす上山八幡宮

意した正月のお飾りやお札の仮設住宅での頒布、その後は初詣…と、年末年始も忙しい毎日が続きそうだ。

「紙のお飾りが揺れたりすると、神様来たって思いますね。今朝も地鎮祭が外であったんですけど、やってる最中に大風吹くときとかあるんですよ。その時は、ああ、来たのかな、って思います」と庄悦さんは小さくうなずいた。

✂ 明日の生き方

「志津川は“グラウンド・ゼロ”になったんだから、何もかも全てなくなったあの場所だからこそ作れる新しい町を、私達は目指さないといけないと思う。」そう力強く語る庄悦さんの妻真弓さんは、手仕事やイベントを通じて仮設の住人たちが集い、気持ちや考えを伝えあう場を作ろうと奔走している。

お父様の祐允さんは言う。「それまで私も含めてみんな、物に囲まれた生活だった。いらぬ物を買って、物を中心に暮らしてね。ところが3月11日3時34分、この街は無くなってね、物ではなくなったんですね。避難所に行って皆さんが支援してくださる姿を見てね、人の心っていうのは、本当に大事だと思いましたね。心のつながりがこんなに大事だって、75歳になるまでこれほど痛切に感じたことはなかった。

他の場所でも「家は残ったが、むしろ物を捨てるようになった。そうして家を失った友人とともにゼロから出発したいと思う」と話す女性に出会った。

「生物誌」(=生命の歴史物語)を標榜するある生物学者が、人間は“生きている”という実感を、自分の時間を生き、他者との関係を感じることで得られる、と言っていたのを思い出す。神職さんの時間が刻まれた真っ白の切り紙細工が人々と、地域の隣人たち、土地や家々の神をつなぎ、一年ごとに更新されて風土や季節と人とを結び付けていく。鎮魂の思いや祝い事の願いがそこに重ねられていく。街並みは消えても、きりことともに人々の生きる希望はあり続け、新しい生き方を探し始めている。

では私はそこから何を学び、どう一緒に明日につながる価値観を生み出していけるだろうか？ 目と耳をすまし、考えることから新年を始めたい。

✨丹羽朋子(にわともこ)

中国の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」を運営。本エッセーのバックナンバーは一芯社のサイト(<http://yixinshe-books.jimdo.com/>)に掲載中です。

四川省・四姑娘山周辺で撮影・保護活動をしている大川さんの Web 版『花図鑑』（末尾にアドレス）が完成しました。それに伴い、大川さんの撮影テクニックをご紹介します。併せて四姑娘山・丹巴ミニ情報も頂きました。（編集部）

四姑娘山周辺の花図鑑をご紹介頂いた機会に、私が花の写真を撮影する時のポイントを簡単にご説明します。但しこの説明は総合的な教科書ではなく単なるポイントですので内容に偏りが有ります。ご注意ください。

1. 花の高さで撮影する

しゃがむのが億劫で立ったまま花を見下ろしてシャッターを押しては良い結果を得られません。人を撮る時と同じように、花の高さや近い所で撮影すると良い結果を得られます。またやはり人を撮る時と同じように、どの方向から撮ったら良いかを色々角度を変えて調べてからシャッターを押します。

作品例：写真① 地上高さ 5cm で咲くアツモリソウの仲間／盛り上がった土の上に有る株なので、膝をついて屈むだけで撮影できました。一般的には斜め顔で撮る方が良い結果を得られやすいです。



2. 斜め後ろ方向からの光線が無難

一般に花の写真は太陽光線が回り込む高曇りの日に撮影するのが良いと言われていて、植物図鑑に掲載するようなカタログ写真はこれで正しいのですが、生き生きとした感動的な写真を撮るにはメリハリのある光線が必要です。この場合、真後ろからの光線では影が付きませんので立体感に欠ける場合が多いです。そのため斜め後ろ方向からの光線が無難です。この時、背景の色合いや明るさがモチーフの花と違っている場所を選んで撮ると良い結果を得られる場合が多いです。ドラスチックに撮りたい時は逆光を使います。

つまるところ朝夕の光線が適して、真昼は撮影にあまり適さない事になります。ですから朝早く起きたり、夕方まで粘って撮影する事になります。特に朝早くは花や葉っぱが水気を帯びていて色合いが綺麗になります。カメラにスポット測光の機能が有れば、この方が間違いなく撮れます。

作品例：写真② 朝の光を受けた雪蓮の仲間／標高 4600m のキャンプ地を朝早く出て、1 時間以上掛けて撮影地まで登りました。右後方からの光線で立体感を出しています。



3. 構図

花を真正面から対称的に中心に置いても良いのですが、非対称的に方向感を持たせたり、添え物を入れて主題の花の位置を端にズラしたり、前景や背景を入れて奥行を出したり、蝶や蜜蜂のような生き物を組み合わせたりして、変化を持たせて撮影すると花の写真の良いコレクションが出来ます。

構図の良し悪しは主観ですが、評判の良い或いは自分が気に入った絵画や写真を沢山見て感覚を磨くべきです。この頃は自動焦点カメラが殆どですので、撮りたいモチーフに合わせてシャッターを半押しして焦点を決め、撮りたい構図の位置にカメラを動かしてからシャッターを押します。

作品例：写真③ バイモの花畑を思わせるような構図／背景は黄色い桜草の群落でバイモではありません。バイモの花と背景の花畑の傾きで左への方向感を出しています。



4. 場所の選定

花が咲いている事が前提ですが、楽な姿勢で撮るには急斜面や崖が有利です。又このような場所では前景や背景に余計な物が少ないです。出来れば急に曲がっている地形を選びます。少し移動するだけで光線の方向を色々選べるので便利だからです。

ただし意図した前景や背景を入れたい場合は別です。花が咲いている特別な環境を入れたり、特別なモチーフを入れたい等の場合です。

作品例：写真④ 急なガラ場に咲くヒエンソウの仲間／
ガラ場では花が疎らに咲き余計な他の植物が少ないです。青いケシも同じ類です。



5. コンパクトカメラの薦め

安価なデジタルのコンパクトカメラは幾つかの点で劣ると言われていますが、花の写真を撮る場合に限れば、最近の機種は優れています。例えば：

- ①コンパクトカメラのレンズは小さくて暗いですが、花を撮る時は絞り込んで焦点深度を深くして撮影する事が殆どなので、気になりません。
- ②レンズ周辺の歪みが高価なカメラのレンズに比較して大きいですが、実用上気になりません。
- ③シャッターを押した後の画像処理時間が長いですが、花の様な静物写真の場合は気になりません。
- ④解像度は高価なカメラと同じです（受光素子を合成した超高級機は別ですが）。16メガ画素カメラですと、後でトリミングしないで済むように構図を決めて撮影すれば、A3サイズの印刷原稿に使えます。
- ⑤造りが頑丈ではありませんが、逆に小さくて軽く操作性に優れています（頑丈さが求められる報道用カメラは別ですが）。

私は数年前まで重い6×7判カメラに接写用のレンズを付けて花を撮っていました（当然ながら手動で絞りと焦点を合わせます）が、今は10数メガ画素のコンパクトカメラで花を撮っています。



とにかく小さくて軽く自動焦点や超接写⇄接写⇄風景切替などの操作が楽で、その上パソコンで画像を直ぐに見れる便利さに脱帽です。

作品例：写真⑤ シソ科の花と蜜蜂／6×7判カメラでこの種の写真を撮るのは大変でしたが、最近のデジタルのコンパクトカメラでは大変楽になりました。

▶HP版花図鑑「Colorful flowers of the Queen Valley」は四姑娘山を含むギャロン地方に咲く花の一部約40科、100属、200枚の写真を収録しています。詳しくは下記をご参照下さい。<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/flowers/flowerlist0-e.htm>

四姑娘山・丹巴ミニ情報

●山と渓谷社のカレンダー

2010年から毎年四姑娘山の風景が「美しき世界の山カレンダー」に掲載されています。今年はムロツ湿原の写真です。機会がございましたらご笑覧下さい。

<http://www.yama-kei.co.jp/products/detail.php?id=841250>

●地球の歩き方

10月に「地球の歩き方 成都編 12-13」が改版発行されました。今回は四姑娘山の8頁に続いて丹巴が4頁にわたって紹介されています。

現在、四姑娘山と丹巴を繋げて訪れるツーリストが増えており、今回の「地球の歩き方」の発行によって更にこの傾向が増えると思われま

す。なお丹巴の風情節(四川10大祭り)を毎年10月26～

28日頃に開催する条例が制定され、2011年から実施されます。下の写真の背景はギャルモ・モルド(女王の尖った岩)山です。機会がございましたら是非お出下さい。



張家界市に入ってトイレ休憩のあと、武陵源のホテルに向う。市内中心部から武陵源まで約30kmあり、夕方6時過ぎに凱天国際酒店に到着した。

さてこの張家界市だが今でこそその名が知られるようになったが、それも武陵源が1992年に世界自然遺産に登録されてからという。市内にはあまり観光スポットもなく、1ヵ所だけ観光した「土家風情園」について最後に書き加えたい。「土家」とは土家族という少数民族の名である。

市の人口は約160万人くらいだがその70%強は前述の苗族、そして土家族、白族などの少数民族の人々だ。この市の名前の由来は、漢の建国の功臣であった張良が、初代皇帝となった劉邦が建国後に同僚を次々と粛清していくのを見て危険を感じ、この地に逃れ仙人となったという伝説から来ているという。ただ彼の墓はこの武陵源の一角にあるらしい。

ホテルで夕食をとっていると、ガイドが「8時から苗族と土家族合同の民族ショーがあるので希望者は7時半にロビーに集合して下さい」と皆に伝える。入場料は200円で、少し高いかなと思ったが、折角ここまで来たのだからと行くことにする。2名を除き、皆ホテル前のバスに乗り込んだ。2名は「今日(4月30日)は、上海世博会の開会式なので部屋でテレビを見る」と言っていた。

会場は、野外ステージで観客席も300人は優に座れるくらい大きい。着くとすでに100名余り座って待っている。あっちでもこっちでもおしゃべりがうるさい。8時になったので始まるかなと思うとなかなか始まらない。8時過ぎても次々と客が来るのだ。別に時間に遅れたからといって急ぐ風でもなく、人の前でも平然と横切っていく。

日本人は時間に几帳面すぎるのだと逆に自分に言いかけたくなるくらいだ。結局8時半すぎに始まった。野外ステージは自然をうまく利用して作ってある。三方が崖のように切り立っており、崖の一ヶ所に大きな滝が流れ落ちている。ショーは1つのストーリーとなっ

ていて、結婚あり、戦争あり、最後は皆平和に過ごす日々が実現するというものであり、実際のこの地方の民族の歴史をふまえた構成という。

最後に身体を鍛えた若者が観客の面前で横になり、厚さ15cmくらいの本物の長いコンクリート板を体の上に3枚重ね、その上に7人も乗る。ハラハラする出し物で幕を閉じた。一時間半の素晴らしいショーで200元は安いなと思いつつ出口に向った。

翌朝9時にバスに乗ったが、まもなく武陵源の入口に着いた。入口付近は広場になっていて、8層くらいの塔に大きく「武陵源」と表示板が掛かっている。ゲートに2日間有効の入場カードをさし込んだあと、次は親指の指紋までとられて中に入る。犯罪者扱いみたいで、あまりいい気持はしない。ゲート内にいるバスに乗り換え

て20分くらい走ったところからロープウェーに乗り込む。何しろ山奥の自然遺産なのだから簡単にはその姿を見せてくれない。ロープウェーは一気に上昇していく。高所恐怖症の私としては下を見ないで遠くを見るようにする。景色も急に変化し、写真で見る天を衝くような岩峰が少しずつ視界に入って来た。

武陵源風景区は、湖南省北西部に位置し、総面積は264km²と広大だ、この景勝地は大きく「張家界国家森林公园」(中国最初の森林公園である)、「索溪峪自然保護区」、「天子山自然保護区」の三つに区分されている。自然が創り出した3000以上の奇峰が雨後のタケノコ状に連なる大原始林地

帯である。このうち243峰は何と千mを越えるそうだ。想像を絶するすごさだ。

ロープウェーからようやく下りてガイドの説明を聞きながら歩きはじめる。いくつかの目立つ岩峰にはそれぞれ名前がついている。筆が立てられたような「御筆峰」、仙女が花を捧げているように見えると説明があった「仙女散花」などを見て賀龍公園に向う。そこには真黒い巨大な銅像が立っており、観光客を睥睨^{へいげい}している。中国各地で大きな毛沢東像を見るが、この像が中国最大の彫像といわれている。この銅像は「賀龍」という人



賀龍公園の中にある中国一大きい賀龍の銅像

物で、中国建国時の十大元帥の一人である。日本ではあまり知られていないと思うが中国では有名だ。この十人に入るには、1927年8月1日の「南昌起義」に参加していることが必須条件である。その後、共産党にいかん貢献をしても十人の中に入れず。賀龍も湖南省の人だが、出身は張家界なのであろうか。

ちなみに「南昌起義」とは毛沢東率いる共産党が蔣介石率いる国民党政府に対抗するため、武装蜂起（中国語で“起義”という）を行い江西省にある南昌市を占領したことをいう。8月1日に武力占領が成功したことにより、8月1日を共産党の「紅軍」の建軍記念日としている。

賀龍公園を後にして、次々と展望台に案内されるのだが、手すりはあるものの、断崖絶壁ばかりで足がすくむ。平気で手すりに寄りかかり、下を見る人がいるが、私にはこのような神経は理解できない。もし落ちたらと考えないのであろうか。数ヶ月前だったかナイアガラの滝の手すりに座り、写真を撮ってもらって戻るときにバランスを崩して滝つぼに落下した日本人女性が報道されたが、危険なことは危険なのである。

どの展望台に立っても、遙か向こうの地平線まで奇峰、雄峰が連続する様子は、確かに世界自然遺産に相応しい。これだけの景観に匹敵するところは世界にいくつもあるであろうが、私はアメリカのグランドキャニオンしか知らない。武陵源のあたりは3億数千万年前は海であったというのだから自然の営みはすさまじい。太古からの地球の息吹が聞こえて来そうだ。今この迫力ある景観を見ることが出来る我々は幸せである。

今回我々は「天子山自然保護区」からスタートしたが、ある地点でマイクロバスに乗り、次の「張家界国家森林公园」に向う。乗ったのはいいがカーブの多い道をカミカゼ運転されるのには閉口した。私の足は無意識

に何度もブレーキを踏む。これでよく事故が起きないものだ。「安全第一」などという言葉は中国国内では根付かないようだ。

今日は5月1日で黄金周（ゴールデンウィーク）の初日であり、天気もいいので人出も半端でない。中国が経済成長するのもうなすける。昼食は山の中腹にあるレストランで摂ったがここもかなり込み合っている。バスでゆられすぎたのか食欲はさほどない。食後いよいよ大ヒットしたアメリカ映画「アバター」のあの山が見える展望台に移動。その場所には映画のパネルが置かれ、それを見るとアバターは「阿凡達」と中国語で書いてあった。鳥の背に乗って石柱群の中を飛び回るイメージを存分に思い浮かべることができた。

奇峰を見あきると見たと森公園地区の最後は360mの高さを上下するエレベーターで下りる。東京タワーより高い所から一気に下りるわけだし、ガラス張りなのでこわかったが、下界に降り立ったときは正直ホッとした。しかしよくこのような場所にエレベーターを設置したものだ。「百龍天梯」という名のエレベーターだそうだ。

そこからバスに乗り、索溪峪自然保護区の中の「十里画廊」というエリアに向う。10分も走っただろうか。そこに電車の駅がある。「十里画廊」観賞用の電車だ。「百龍天梯」といい、この観賞用電車とい



展望台からの「武陵源」の眺め



映画「アバター」に使われた岩峰

い、これだけの山奥によく作ったものだと感心する。電車の線路の左右はさまざまな形の巨大な石柱があり、まるで画廊で見る感じで楽しむようになっていく。線路と並行して徒歩のコースもあり歩いている人もいる。有名な柱は「採薬(薬)老人」と「三姉妹」という。要は石柱を何かに見立ててネーミングしているわけだ。ガイドが説明しても、そのように見えないものもある。要は自分で勝手に想像すればいいのだが。「採薬老人」という石柱は薬草をとってそれを背負う老人に見えるというのだが、何もそこまでこじつけなくてもよさそうなものと思った。でもこのような楽しみ方もあるのだろう。武陵源の1日目はここを見てようやく終りを告げた。連続するあまりの迫りに頭がくらくらするくらいである。

2日目は、索溪峪自然保護区にある「宝峰湖」に行く。誰かが湖と岩山との風景がベトナムのハロン湾に似ていると言っていたが、私はベトナムに行ったことがないのでよく分らない。ここは船に乗ってゆったりと下から巨峰群を見られるのである。巨峰には大きな木がいくつも生えており、当初は1本の木さえなかったであろう石柱が緑におおわれるにはいかほどの年月を要したであろうと思わずにはいられない。

ここでも苗族と覚しき男女が歌の交歓をしている。とても長閑で、世俗のアカに染まらない原始的な風景である。湖上をすべるように半周して船着場に戻る。次に、昨日は張家界国家森林公园内で上から下を見る風景であったが、今日はこの森林公園の中にある金鞭溪エリアを散策するコースで下から上を仰ぎ見ながら歩く。頬に風の戦そよぎを受けながら歩く。全長6kmの川沿いの散歩道をゆったり歩く。時の流れがずいぶん遅く感ずるくらいである。

途中魯迅の横顔に見える岩山や金鞭岩という名の表面がつるつるした岩峰を見る。そのうち民族衣装を身につけた苗族や土家族の娘さんと一緒に写真をとる場所があり、人だかりがしていた。聞いてみると1回10元という。

かれこれ1時間半くらい歩いたであろうか。出口に着いたので全員そろそろのを待って記念撮影。そしてバ

スに乗り込む。いよいよ武陵源ともお別れする時が来た。まだまだ見ていないところも多いが、皆充分満足した顔をしていた。

我々が見た武陵源は2日間とも快晴で遙か遠くまで見渡され、そのスケールの大きさに感動したが、ガイドによると霧がかかった山水画の世界も素晴らしいそうだ。かなわぬ夢であろうが、もしもう一度訪れることが適えば霧の武陵源をこの目で見てみたい。

バスは市内に向け出発したが、この日の最後は「土家風情園」だ。ここは土家族の聖地でもあるそうだが、彼らの生活ぶりがよく分るように建物が配置されている。散在していた彼らの建物を15年前に移設して作りあげたという。

特に黒っぽい9層の木造の建物は斜面に建てられ、天に昇る龍のイメージがあり、その大きさと構造に圧倒される。一番上まで階段が付いていて、最上階から見る風情園の美しさはとても印象的であった。この建物の前が広場になっていて、午後5時からショーがあるというので見学した。中国の少数民族はテレビでもよく紹介されているが、特に



民族衣装を着た土家族の女性たち

女性の民族衣装はデザインといい、色合いといい、数千年の歴史を充分に感じさせるものである。パリのファッションショーもいいが、ここでのショーの衣装の方が私にとっては素晴らしい。美しいというだけではなく、歴史を感じさせ、そこで生きているという生命感と絆ともいえるものを見ている人に与えてくれる。

この風情園には観光客用のレストランがあり、6時半から皆で円形のテーブルについて食事をした。土家族の料理は素朴だが、心に残る美味しい料理であった。メインディッシュ(?)は「杀猪菜(杀=殺)」シヤースーツァイといってブタのいろいろな部分を入れたナベ料理であった。血をかためた料理も出たが、私はどうもこれは苦手である。旅の楽しみのは行った先々でのその地方の料理を堪能できることである。風景に酔い、酒に酔い、少数民族の存在感に酔った2日間であった。

芙蓉の国・湖南省の旅はいよいよ終りに近づいた。バスは窓に皆の顔を写しつつ張家界荷花機場に到着した、そして午後11時、春秋航空8872便は我々を乗せて上海に向けて飛び立った。

前は動物園だったので今回は植物園の話しましょう。スリランカには大規模な国立植物園から、個人経営の小規模なスパイスガーデンと呼ばれる物まで各種の植物園があります。スパイスガーデンは正確には植物園とは呼べないかもしれませんが、スパイスも植物だと言う事で今回は植物園として話を進めさせて下さい。

まずはスパイスガーデンの話から始めましょう。ここにはスリランカの特産品である様々なスパイスが集められています。スパイスガーデンはキャンディの周辺に点在していて、特に国道1号線沿いにキャンディの手前からキャンディの先にあるマータレーにかけて集中して有ります。目印としては、〇〇スパイスガーデンと書かれた看板は勿論ですが、看板よりも目立つ様に書かれた「1」や「15」といった数字が目につきます。この番号は政府の公認登録番号を表しています。番号が若いほど老舗という事になります。観光ガイドを雇うと必ずと言っていいほどスパイスガーデンに立ち寄る事を勧めてきます。又、スパイスガーデンは入場料が無料なのですが理由があります、理由は想像がつくと思いますが最後に説明します。

日本からの友人やお客様と一緒に何箇所かのスパイスガーデンを訪問した事があります。ゲートをくぐって駐車場に車を停めるやいなや、大概の場合はやたらと愛想の良いオーナーが迎えに飛び出てきます。挨拶とともに名刺を配り観光客なのか駐在員か、お客さんの名前や出身国を聞き出します。こちらが観光客で日本人だと判ると更に愛想が良くなるようです。逆に駐在員だと判ると少し落胆します。身上調査が終わると、直ぐにガーデンに案内してくれます。イングリッシュガーデンとまではいきませんが、周遊するように小綺麗に造られた小道に沿ってたくさんのスパイスが植えられています。シナモン、ターメリック、カカオ、ナツメグ、ペッパー、レモングラス、チリ、その他にも僕の聞いた事も無いようなスパイスまで多種多様のスパイスがあります。特にシナモンは英国の植民地時代には紅茶・ペッパーと並んで主要輸出品でした。偶然にも僕がスリランカに駐在していた時に住んでいた地域は、植民地時代にはシナモン農場があった事から現在でもシナモンガーデンと呼ばれています。

僕が驚いたのはバニラです。バニラがどのような形状で栽培されているのか考えた事が有りませんでした。漠

然とバニラの香りから察するに可愛らしい花の種かと想像していたのですが、まさかエンドウ豆のようにサヤに入っているとは、しかも乾燥させた後ではサヤが変色して真っ黒です、本当に驚きました。小道を歩きながら、スパイスの名前、どのような香りがするのか、どのように使用するのか、次々に説明してくれます。

オーナーは簡単な英語で話をしてくれるので何とか理解は出来るのですが、何しろ数が多すぎて聞く端からどれが何やらサッパリ判らなくなっていくます。タイミング良く収穫期に入ったスパイスがあれば、その場で割って香りを嗅がせてもらえます。日本語を喋れるオーナーもいると聞いた事がありますが僕は会った事がありません。何番の数字が書かれたスパイスガーデンだったか覚えていませんが、一箇所だけ手書きの日本語で書かれた簡単なメモが表示されているのを見た事があります。

順路に従ってガーデン内を一巡すると自動的に室内の展示場へと入って行く様なレイアウトになっています。部屋の中にはスパイスを加工する過程の写真だとか、パック詰めされた樹皮や木の実、種、フレッシュハーブ、ドライハーブ、スパイスとは関係のない民芸品等が展示されていて手に取って見る事ができます。一旦は部屋の奥に下がっていたオーナーがいつの間にかテーブルに紅茶を用意して、お茶を飲むように誘ってきます。

最初のうちは紅茶を飲みながらスパイス談義に花を咲かせていますが、そのうちに別の場所(スパイスガーデンには1種類につき2,3本しか植えていない)にある農園で栽培しているスパイスを買わないかという話になっていきます。確かに製品は本物なのですが、価格が信じられない程高値です。それでも日本で買うのに比べれば安いのですが、当地の一般価格に比べれば数倍以上の価格になっています。性質の悪いガイドはキックバック(割戻し)を目当てに、オーナーとぐるになって安さを強調して買うように勧めてくるので注意して下さい。

これからが旅のお楽しみの値段交渉です。言い値の半額ぐらいから交渉してみてください。交渉が決裂しても自宅用か土産に購入するのであれば、キャンディやコロンボにあるスーパーマーケットに行けば一般価格で買う事が出来るので、此処ではスパイスガーデンの入場料と園内の案内料のつもりで小さなパックを購入すれば充分だと思えます。国立植物園の話は次回にしましょう。

孤児院での仕事の任期を終えてから、首都ナイロビでの仕事の為にすぐに住み始めたのがムロロンゴ (mulolongo) という町だった。

住まいは、2階建ての集合アパートだった。ここには、2001年の5月から2002年の5月までちょうど1年間住んだ。日本人は私1人で、「ママ・ジャパニ」と知らない人からもあだ名で呼ばれていた。「日本人のママ」と言う意味だ。住んでいるだけでも目立っていた。そして、毎日乗り合いバスで通勤していた。「ナイロビに住んでない」「豪邸に住んでない」「車がない」という珍しい存在の外国人の私は、まさに好奇心の的だった。私の方は、「普通のケニア人」との「地域生活」を楽しみに移り住んできたというわけだ。

朝8時ごろの乗り合いバス「マタツ」でナイロビの職場まで通勤していた。10人前後しか乗れない小さなバス、しかも始発駅ではないので、私が乗り込む駅ですでにほとんど満員で、運がよければ1、2人が乗れるといった具合だ。当然のごとく、行列が出来ていて、長いときには30分くらい待つて乗っていた。時速は、100キロぐらいで出ているのだが、ナイロビに近づくほど渋滞になり、遅くなっていく。小1時間かけてナイロビに辿り着く頃には、疲労で身体はへとへとになる。

そして仕事を終えて、帰るときがまた一仕事だ。今度は、ナイロビのダウンタウンにあるバスターミナルで、私が帰る地域行きのバスの列に並ぶ。17時過ぎに並ぶと、いつもすでに50人くらいの列が出来ている。バスターミナルには、大型バス、小型バスやタクシーなどの乗りものが行き先別にやってくる。学校の運動場1、2つ分くらいの広さのターミナルは人や乗り物があふれんばかりだ。みんな早く帰りたいのは同じだ。日本の都会のラッシュアワーの様子と全く同じだ。しかし、違うのはここに来るときのわくわくした気持ちだ。

私が駅に着くと、まずコンダクターと呼ばれる交通整理のおじちゃんがいつも挨拶に来てくれる。「Habari ya kazi? (仕事はどう?)」と満面の笑顔で握手してくれる。その後、キャンディーやティッシュを箱一杯に詰めて肩に乗せて売っている雑貨の売り子のおにいちゃんが近づいてくる。「Candy? (キャンディどう?)」と訊いてくる。いらないというと、「bisket? (ビスケット)」、「tissue? (ティッシュ)」とすべての商品を紹介してくるのである。その楽しそうな笑顔。その次は靴磨き屋さん、腕時計屋さん等。商品を手に持ち行商する人々が街には沢山いるケニア。そして人が集まる場所には、必ず彼らが出て、外国人ともなると必ず営業してくるのだ。

毎日同じ場所同じ時間にいる外国人女性の私。やりとりするだけでも疲れるし、目立つし、正直うんざりすることもあった。「買わない」といって目もあわせないこともあった。でもそんな遣り取りを毎日続けていると、彼らと会話しなかった日は、何故か彼らが心配になってくる。いつの間にか彼らに対して友情に似たものが芽生えているのだ。こんなことがあった。風邪を引いて2、3日顔を出さなかった後、暫くぶりにバスターミナルの傍を通ると、「どうしたの?」「元気だった?」「心配したよ」等とってはいろいろと訊いてくる彼ら。「商売目



ムロロンゴのアパートの部屋の前に立つ筆者
2002年 撮影は近所の方

的の嘘の心配なんだろう」と思っていたら、本当に心配そうに何人も何人もそう言うてくるのだ。

財布にお金がなく、バス代がないことに気が付いたときには、「いいよ、貸してあげる」と連絡先も分からない私に小銭を貸してくれる。バスがストライキをして一台も運行しなくなった時もあった。「どうやって家まで帰ろう」と悩んでいると、いつもの行商集団の1人1人が、いろんな案を出してくれた。「車を出してあげる」「最寄りのバス停まで連れて行ってあげる」「ナイロビの親戚の家を紹介してあげる」等。正直どれもあやし

そうだ。でも彼らを100%信じられない自分がとてもいやな人間に思えてくるのだ。

「ここはアフリカ、どろぼうも、うそつきも何でもいる」そんなふうに分身に言い聞かせ続けて生活していると、親切と嘘つきの違いをどこで判断するのか分からなくなってしまう。外国で暮らすには人の親切を簡単には信用してはいけなさと肝に銘じておくことは大切なことだと思う。しかしそれだけではただの人間不信でしかない。

そんなこんなで、飴を買ったり、傘を買ったり、ちょっとした買い物を買ったからするようになっていた。でも私が心配したように「もっと買って」と押しつけてきたり、別の行商が殺到したりということはなかった。

それよりも、バスの席を取って置いてくれたり、気持ちだからといってビスケットや飴をくれたりする。一日数百円の小銭を稼いで生計を立てている彼らにとっ

ては、そんな小銭も楽な親切ではないはずだ。ケニアでは友達の友達は、その友達には親切なのだ。気がつけば、いろいろな人が楽しくて、親切だった。

日本でもラッシュアワーの時間帯に電車に乗ることがたまにある。人の波に吞まれながら、あっちこっち押されたり、長い行列で順番を待ちながら、ふとした時にケニアでの日々を思い出すことがある。あの彼らの笑顔、会話、その親切。ラッシュアワーの苦痛はケニアでも同じだ。でも思い出すのはナイロビでの楽しかった通勤時間のことばかりなのである。

ケニアには袖振りあうだけの楽しい他人が沢山いる。このような人たちとの時間がいたるところにある。アフリカの諺に、「山と山は出会わないが、人と人は出会う」というのがある。日本語でいうなれば、「一期一会」だろうか。到る所にある束の間の楽しい他人との触れ合い、そんなケニアでの時間がとても懐かしい。

松本杏花さんの俳句

「千里同風」より

探梅や足音聴き池の鯉

tàn méi jìn yǎ xìng
探梅尽雅兴

gǎn zhī lín jìn jǎo bù shēng
感知临近脚步声

chí zhōng lí yú jīng
池中鲤鱼惊

季语 美，春。

赏析 译者最喜爱这首俳句。首先是其意境美，作者尽情赏梅，一个切字，将忘我赏花的心情刻画得入木三分。其次那寂静的环境美，作者不写脚步声，而是写池中的鲤鱼耳朵灵，独树一帜，堪你佳作！此首及下首作于东京著名的古典园林小石川后乐园。



雪つりの風と遊べる日永かな

diào zhī fáng xuě yā
吊枝防雪压

què yǔ fēng ér xiāng xìshuǎ
却与风儿相戏耍

cháng rì zhōng tiān guà
长日中天挂

季语 吊枝，冬。

赏析 应能看出，此首与上两首均为冬末之作。童话般的构思将雪乡的寒风拟人化了。虽然仍是凛冽有余，但相互玩耍的氛围预示着日照将越来越长，春天不远了。

【皆々様、ありがとうございました】

12月18日の催し(当紙20Pの)は、活動報告にもありますように、鶴川地区・能ヶ谷地区・広袴地区の町内会や自治会にポスター掲示・チラシ配布などのご協力とお力添えをお願いし快く受け入れて頂いたの開催でした。

当会が、鶴川市民センターでの「中国語講座」と鶴川第二小学校体育館での「気功・太極拳」講座、それぞれの参加者有志たちで「つるかわ中国文化研究サークル」の名称で活動を立ち上げて以来20年になろうとしています。が、今回の催しは初めて地域の皆様と繋がる活動で

した。「絆」の年の締めくくりにもこのような活動の機会を持つことができ嬉しく存じます。

留学生たちのスピーチには、沢山の「ありがとう」という言葉がちりばめられており、目頭を熱くして聞きました。私も、留学生の皆さんたち同様に、ご支援いただいた地域の皆様、そして催しにご参加くださいました皆々様、更にこの機会を提供頂いた町田市にも心を込めて「ありがとう」をお伝えしたいと思います。

日中文化交流市民サークル 'わんりい' 田井

膝に絡む草を掻き分けながら、草原の斜面を下っていった。散歩の途中、ほんのちょっとした思いつきで登ってしまった神山の山頂で、景色の中に小さく眺められた村のお寺に心惹かれた私は、発作的にその寺院を目指してフラフラと道の無い山の斜面を下り始めてしまったのだ。毎度の事だが自分がいつ突然何処に向って行こうとするのか自分でも判らない。まったく旅に出ている時の私は、予測不能な自身の行動についても大変なのだ。

案の定、いくら草地に覆われているとはいえ、道なき山の斜面を下るのはそんなに楽なものではなかった。山頂からはハッキリと目視できた村のお寺は、山を下るとつれ視界から消えていき、後は当てずっぽうにそちらと思われる方向目指して、一面草むらが広がるばかりの斜面を歩き続ければ、山頂からは然程でもないように思われたお寺までの距離も、山ひだが重なり折りたたまれた地形をなぞれば、そこそこ結構な道のりだと判明し、尾根の谷間でいつからそこにあるのか、すっかり白く乾いた水牛の骨が散らばっているのに遭遇した時には、まるで自分が草でできたアリ地獄の中に落ち込んでしまったような不安な気分も一瞬胸を横切って、いったい自分は中国の奥地までやって来て、何故こんな場所を一人さまよっているのかと疑問と自嘲の入り混じった気持ちで湧いてきて苦笑したりしているうちに、突然目の前が開けてくると、ポンと湿地帯の平地に降り立つ事ができた。

山裾には細い小川が流れていて、このあたりの地質の関係なのか水の中には赤い石ばかりがたくさん散らばっている。旅の思い出に手頃な一つを拾いリュックに放り込むと、ぬかるんで歩き難い湿原の中でどうにか乾いている場所を探しながら、目指す方向に歩を進め、やがて小さな橋がかかっている場所に辿り着くと、そこからは目指していた村が目の前の高台に見えていた。

やった! やった!!! 山の上から眺めていたこの場所まで、ちゃんと来る事が出来たんだ〜!!

この日の朝は失望でしょんぼりしていた私が、心の中で快哉をあげていた。

川を渡った先は小さな農道のような小道で、村の高台に至る緩やかな斜面にはほんのささやかな畑が作られ、目指すお寺はその高台の外れに建っていた。

本当に小さな村だった。両手の指で数えられる程の数少ない家も過疎が進んでいるのか、人の住んでいる気配が感じられないものもある。

私が目的地であるお寺に向かって、畑の脇の道を登り始めた時だ。余所者が村を訪れた気配に気付いたのだろうか、畑の上に建つ家の窓からおばあさんが顔を覗かせ、我が家の方向に向ってくる私を見ていた。

ちょっぴり緊張した。観光客の多い土地柄ならいざ知らず、こんな場所まで入ってくる外国人などそうはいないだろう。この村での私は完全に得体のしれない余所者だ。土地の言語など判らないので、とにかく明るい声で「ニーハオ!」と叫んで手を振り、怪しい者では無い事をアピールすると、おばあさんは、サッと再び窓の中に姿を消した。

畑の脇の道を登りきると村の中を通る一本道だ。もう間近にせまっている寺院はその先にあり、そちらに向って道を歩き出そうとしたその時、道の脇に建っていた先ほどの家のドアが開くと、何処からか見ていたのか、まるで急いで中から出て来たような様子のおばあさんが私に向かって声を上げた。

土地の言葉なので何を言っているのか判らなかったが、様子から察すればどうやらこっちに来てと言われていたようだ。訳が判らないままオズオズと近づいていくと、おばあさんは私に家の中に入るようにと仕草で促した。

え? . . . 何で???

躊躇はしたが特に逆らう理由も無く、訳の判らないままに恐る恐る家に足を踏み入れると、中ではハイハイを始めた年頃の赤ちゃんが先を柱に結んだ紐につながれて遊んでいる。そんな屋内の光景にちょっと安堵した私が、勧められるままに床に座ると、おばあさんは部屋の奥から水の入ったグラスとチベット族が常食としているチベットパンを運んできて私に差し出した。

. . . ???

なぜ自分がこの家に呼び込まれたのか全く訳が判らなかった。だが、おばあさんは私に水とパンを勧めると、満足そうに私の向かい側に座り、後は、孫をあやしなからチベット族の老人達の誰もが持っているハンドル式のマニ車を手にして回しながらニコニコしているだけで、それ以上の用事は何も無いといった様子なのだ。

ぼんやりしている私に、おばあさんは再び食べ物を勧める仕草をして笑顔を見せた。

もしかしたらこれは・・・私を家に招いてくれたの？ただ道を歩いてきただけの、言葉も通じぬ異邦人の私を？ ゆっくりと疑問が解けたような気がしてきた時、私の胸は温かい気持ちに包まれ始めた。

質素な部屋が二間だけの小さな家だった。おばあさんがパンを取り出してきた部屋の片隅には竈があり、きっとそこが台所なのだろう。家具といえるようなものは殆ど何もなかったが、二間続きのとなりの部屋は片側の壁一面が床から天井まで届く祭壇となっていて、ドラマの写真や小さな仏像や蝋燭や、その他仏教に関する色々な物がこまごまと並べられ、素朴な電気仕掛けで自動的にクルクル回り続けるおもちゃの様なマニ車も置いてある。祭壇の片隅には、日本では既に見かけなくなった旧式のカセットデッキが置かれ、そこからは静かで単調な音楽が流れていた。

となりの部屋にはおじいさんも座っていた。何やら裁縫台のような機械の上で一心に縫い物をしている様子だ。家に入ってきた異邦人の私に全く興味を示す様子も無く、淡々と無心に作業を続けていた。

言葉の通じないおばあさんと私は、ただお互い微笑ながら向かい合って座っていた。このおもてなしに何か答えたかった私は、ザックの中からもう残り少ない折り紙を取り出して鶴や花を折り手渡すと、おばあさんは感心した様子で面白そうに眺めていたが、小さな赤ちゃんは私がズボンのポケットから取り出した鏡の方が気に入ったようで、私から鏡を取り上げると不思議そうに何度も覗きこんでいる。この子のお父さんとお母さんは、祖母に孫を預けて町に働きに行ってるのだろうか？

斜面の上の高台に建てられた家は日当たりが良く気持ちが良かった。聞こえてくるのはおばあさんが絶え間なく回しているマニ車の軋む音と、おじいさんのコトコトと縫い物をつづける音、ラジカセから聞こえてくる静かな音楽だけだ。

何の警戒心も無く他者を家の中に招き入れ、午後の柔らかな日差しの中で愛らしく遊んでいる孫を微笑みを浮かべ見守る老女と一心に仕事を続ける老翁。家の中は穏やかに満ちている。行きずりの見知らぬ他人の家で、私の気持ちは安らいでいた。

それにしても・・・

真っ白な長い髪を女学生のように三つ編みにした、

小柄な可愛いおばあさんは、何かやっている時以外はずっとマニ車を手にしている。まるでそれを回す事が生活の一部となっているようだ・・・そんな事を思っていてふと気がついた。祭壇に置かれたラジカセから絶え間なく流れている、単調で静かなメロディを繰り返すこの調べは、音楽では無くお経なのだ。

この家の中にはごくごく自然に生活の一部として、信仰が満ち溢れているようだ。きっとこのお経は、毎日々朝から夜まで流れ続けているのではないだろうか。何もない質素な部屋に、祭壇だけが大きく設えられたこの家で、おばあさんは日がな一日お経を聴きながら、こうしてマニ車を回して過ごしているのだろう。

その暮らしぶりは決して経済的に豊かそうではないが、見知らぬ他人を我が家に引き入れ、もてなして笑顔を見せているおばあさんの顔は幸せそうに見えた。理塘で過ごした時にもチラッと感じていた事だが、そんなおばあさんの様子を見ていると、やはりこの土地での信仰は娯楽と一体を成しているものなのだろうと確信に近い思いがした。

近年になって下界の文化が流入してくる以前には、娯楽など存在し得えない厳しい自然環境の中でつつましく生きるチベット高地の暮らしは、敬虔な祈りである信仰が心の拠り所であり最上の娯楽でもあったのではないだろうか？ そう考えれば人生の中の数年をもちかけ、五体投地で地を這いながら巡礼の旅に出ることも厭わない人々の気持ちも理解できるような気がした。ことに長い人生を生き抜いて自身の役割を果し終えた老人達の生活では、その殆どを占めているのが神への信仰なのであろうと、この老夫婦の暮らしぶりを垣間見て感じられ、以前観た事のあるチベットの映画が思い出された。

紆余曲折を経て激動の人生を生き抜いた老夫婦が、人生の終盤を信仰に捧げながら穏やかに暮らし、その生涯を終えていく姿が描かれていたその映画に、目の前の二人の姿が重なるような気がした。 (続く)

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

【‘わんりい’活動報告】

平成23年度町田市「つながりひろがる地域支援事業」対象事業

つなげよう 広げよう 地域の「輪」と「和」 聞いてみよう! 留学生たちのスピーチ!!

楽しもう!天女達の楽曲・中国民族音楽の演奏!! 1部:アンデスの民族楽器・ケーナの演奏/山下孝之
2部:留学生たちのスピーチ/劉麗那・顧傑・朱晏璐・劉芸嬪・劉源 3部:中国民族音楽演奏/錢騰浩(笙)・曹雪晶(二胡)・林敏(揚琴)

2011年12月18日(日) 会場:鶴川市民センター・ホール 13:00~15:45

〈感動を呼んだ留学生のスピーチ〉

今回の催しは、表題にもあるように平成23年度町田市・市民提案事業の対象としての助成により開催しました。主催は私達‘わんりい’ですが、この事業の趣旨が「地域の問題解決のために、地域がつながりひろがる」ことへの助成ということで、町田市と(財)町田文化・国際交流財団の後援のもとに、チラシやパンフに掲載の、鶴川3団地自治会、平和台自治会、日本スリランカ文化交流協会の他、能ヶ谷地区6自治会、広袴地区2自治会、鶴川地区3丁目及び4丁目自治会などの地域の自治会・町内会ほか、コープとうきょう・参加とネットワーク推進室の協力と支援を頂き開催されました。

催しは、1部:アンデスの民族楽器・ケーナの演奏/山下孝之 2部:留学生たちのスピーチ、3部:中国民族音楽演奏/錢騰浩(笙)・曹雪晶(二胡)・林敏(揚琴)という3部構成で開催。留学生のスピーチの前の、ケーナ演奏では心の深いところで共鳴するような、山下孝之さんのオリジナル曲の演奏、スピーチに続く中国民族音楽の演奏は、最高レベルの演奏力の持ち主たちによる本格的なものでした。

2部は、りゅうれいな 劉麗那さんと こけつ 顧傑さん、昨年9月に来日の同じく国士館大学4年生の えんろ 朱晏璐さん、りゅうげいしん 劉芸嬪さん、りゅうげん 劉源さんの合せて5名の国士館大学21世紀アジア学部の留学生が、それぞれ「日本人の生活で思うこと」「僕の留学の目的」「日本人が私に教えてくれたこと」「私の留学生活」「ありがとう」という題名で、ゆっくりと丁寧に会場の反応にも心を配りながら真摯に自分たちの思いを語りました。

また、スピーチの中で「上を向いて歩こう」が歌われると、会場から手拍子が起ったり、スピーチのユニークな視点に笑いが起ったりと終始和やかな雰囲気のある楽しい時間になり、スピーチをただ単に受け身で聞くのではなく、舞台の留学生と会場の聴衆の心が見えない糸でつながるのを感じました。温かな好意のこもった沢山の拍手がそれを証明していると思いますし、休憩時間や帰り際には、留学生に声をかけてくださる地域の方々もあり、留学生と地域の皆さんがこの催しを通してささやかな歩み寄りができるのではないかと思います。

アンケートの自由感想にもありましたように願わくば



花束を手に満場の拍手を受ける出場者達

この催しが今回限りのものでなく、地域の皆様と連携し、2回、3回と続けられ、地域と留学生たちとの良いかわりができ、留学生たちの若い活力や体力が鶴川の街に生かされることを祈りたいと思っています。

尚、この日の留学生たちのスピーチをそのまま‘わんりい’に順次掲載予定です。本号では、22ページと23ページに劉麗那さん、顧傑さん、朱晏璐さん3名の原稿を掲載してあります。

(報告:有為楠君代)

【アンケート自由感想より】

▶日本の大学への進学を志す人たちに日本語を教えている。留学生の素顔を一般に市民の方々に知って頂く機会がもっと町田市内にあってよいと思う。又初めて一流の演奏者による中国民族音楽の演奏聴くことができました。……(50~60歳台)

▶初めて参加しましたが、‘わんりい’の皆様のご尽力の賜物と思います。とても感動しました。(50~60歳台)

▶留学生にスピーチの機会をの設定がGoodです。プログラムの構成がGoodです。(70歳~)

▶‘わんりい’さんの留学生支援を応援します。演奏もとてもすてきでした。会場がもう少しよいところだったらと残念。留学生のスピーチ、皆さん良くまとめられていて感心しました。……(70歳~)

▶第2回を希望します。(50~60歳台)

▶国士館大学町田校舎の21世紀アジア学部にアジアの留学生が学んでいることを初めて知りました。中国の若い方が美しい日本で話して下さったこと、中国の方が中国の

楽器で日本の曲を美しく演奏して頂けたことで感謝を込めて外国の方々に相對したいと思いました。(70歳～)

▶ 国土館大学の大学祭でもこのような催しがあってもよいのではないかと思う。(50～60歳台)

▶ とても素晴らしい会でした。日本の若い方々ももっと参加してくれたらよいと思います。これからの時代は世界とつながって行かなければいけません。……国際的な人材が育つように先輩方の力が必要です。(30～40歳台)

▶ 留学生の皆さんの日本語がしっかりしていて考え方もよくまとめられているのに感心しました。頼もしいと思います。(70歳～)

▶ 第1回とのこと、とても有意義な催しだったと思いますので、続けてくださいますようお願いいたします。……スピーチが若い方でしたのに聴衆に同年代の若い人を動員できないことが残念でした。(50～60歳台)

▶ 留学生のひたむきな勉強に対する心がひしひしと伝わってきて70歳過ぎた私も現在の生活を少しでも意義ある日々を過ごしてゆこうと思います。……。(70歳～)

▶ 久しぶりにデジタルの音楽ではなく、アナログの音楽で心が洗われました。留学生のスピーチもとてもよかった。(70歳～)

▶ 山門峡の二胡がとても素晴らしかった。……。

▶ 留学生の方々のスピーチが素晴らしかったです。皆さんとても前向きに力強く生活してらして感動しました。私はこの所、日々の生活に流されてばかりでしたので大いに反省させられました。お陰でパワーをいっぱい分けて頂いた気分です。(50～60歳台)

▶ 演奏素晴らしかったです。スピーチも初々しく、又4年生のは流石でした。(50～60歳台)

▶ 多数の出席でビックリしました。……日本の芸も見せられたら良いと思います。素晴らしい演奏でした。(50～60歳台)

▶ 身近に留学生の考えを聞いてとても興味深かったし良い体験でした。(50～60歳台)

▶ ケーナの素晴らしい演奏から始まり、留学生さんの素直な気持ちや感動、日本での様々な経験から学んだことなどの発表、素晴らしかったです。音楽演奏は勿論素晴らしいです。“真棒！”です。(50～60歳台)

▶ 生の留学生の音がとても新鮮でした。改めて日本の自分のことを考える刺激的な機会になりました。(50～60歳台)

▶ 中国楽器の演奏はとても素晴らしかったです。二胡の音色はきれいで懐かしく聴きました。(50～60歳台)

▶ 久しぶりに良い音楽に触れて気持ちが穏やかになりました。500円では安すぎるように思われました。又このような機会を作って頂けたらと思います。(70歳～)

▶ とても良い(又必要な)催しと思います。(70歳～)

▶ ケーナも中国民族音楽も生で聞くの初めてだったのですがこんなに素晴らしい音楽を聴くことができ本当に良かったです。(50～60歳台)

【アンケート集計】

*参加者227名(招待者含む)中回答者61名

1. 今回の催しを知ったのは(複数回答あり)

- | | |
|------------|-------------|
| イ. チラシ29名 | ロ. 知合の紹介34名 |
| ハ. まちだ広報4名 | ニ. その他6名 |

2. どちらにお住まいですか

- | | |
|-------------|---------------|
| イ. 鶴川団地11名 | ロ. 団地外の鶴川地区5名 |
| ハ. 能ヶ谷地区10名 | ニ. 広袴地区8名 |
| ホ. 真光寺地区1名 | ヘ. 町田市内他地区18名 |
| ト. 町田市外7名 | 無回答1名 |

3. どの年代ですか

- | | |
|---------------|--------------|
| イ. 10～20歳代0名 | ロ. 30～40歳代4名 |
| ハ. 50～60歳代35名 | ニ. 70歳代以上21名 |
| | 無回答1名 |

4. 今日の催しは全体として.

- | | |
|---------------|-----------|
| イ. とても良かった44名 | ロ. よかった8名 |
| ニ. まあまあ0名 | 無回答9名 |

5. 個々のプログラムについて

① ケーナの演奏

- | | |
|---------------|-----------|
| イ. とても良かった43名 | ロ. よかった7名 |
| ハ. まあまあ1名 | 無回答10名 |

② 留学生のスピーチ

- | | |
|---------------|-----------|
| イ. とても良かった44名 | ロ. よかった7名 |
| ハ. まあまあ0名 | 無回答10名 |

③ 中国民族音楽演奏

- | | |
|---------------|-----------|
| イ. とても良かった48名 | ロ. よかった3名 |
| ハ. まあまあ0名 | 無回答10名 |

6. 留学生と交流の機会があれば参加されますか

- | | |
|--------------|-------------|
| イ. 是非参加したい8名 | ロ. 参加したい27名 |
|--------------|-------------|

7. 「6.」の質問に○を付けられた方への質問

どのような交流を希望されますか

- ・ 飲みながら心が触れ合う会合を継続的に
- ・ 対話の会
- ・ 中国語で対話する会5名
- ・ 囲碁交流
- ・ 料理教室/料理作り合い/食事会など 6名
- ・ 合同ハイキング2名
- ・ 出身地の紹介
- ・ 文化の紹介
- ・ 小学生と交流させたい
- ・ 日本家庭宿泊体験
- ・ 今回のようなスピーチの会3名
- ・ 歌う会
- 等々

日本人の生活で思うこと

国士舘大学 21世紀アジア学部3年 りゅうれいな 劉麗那 (遼寧省興城市出身)

今年の九月に日本へ来ました。もう三ヶ月になりました。この間に人身事故で電車が止まることがよくありました。そしてその度に私はなにかとても複雑な気持ちになりました。日本人はどうしてそのようなことをするのでしょうか。命は何よりも大切なのではないのでしょうか。日本人が命を捨てたいと思う理由はなんなのでしょう。やはりストレスがたまりすぎているのだと思います。

先日私は友達と一緒に東京タワーの大展望台にのぼりました。もう夜の8時になっているというのに、多くの高いビルの電気はまだついてます。中国では、この時間は会社員はもう会社から帰り、家でのんびりしています。しかし、日本では会社員はまだ仕事を続け、残業していらっしゃるのです。こんなに遅い時間まで働いては仕事のストレスがたまり、精神的な負担も増えるでしょう。精神的な負担が増えれば、命を捨てたい気持ちにもなるでしょう。

科学技術のたえまない進歩につれて、人々の生活のリズムはますます速くなってきてストレスが増えています。

す。生活の中でのさまざまなストレスは人々の精神的な負担になります。このような精神的な負担は人々のこのころの健康にも、体の健康にも悪いと思います。

楽しく生活し、余裕を持って、仕事をするのは大切なことなのではないでしょうか。幸福な家庭とは、家族がみんな一緒に楽しく暮らすということだと思います。自分のために、家族のために、命を大切にすることが必要です。私は人生は旅みたいなものだと思います。今ストレスの下に生活をしている人々は生活のリズムをゆっくりさせて、途中の美しい景色を見たりしながら、仕事をするのがよい人生になるのではないのでしょうか。



僕の留学の目的

国士舘大学 21世紀アジア学部3年 こけつ 顧傑 (遼寧省大連市出身)

歴史上で大きな航海を成し遂げた人物として、ヨーロッパでは、ヨーロッパ人として初めてアメリカ大陸へ到達したイタリア出身のクリストファー・コロンブス、世界一周を成し遂げたポルトガルのマゼラン、ヨーロッパからアフリカ大陸を回ってインドへ行く航路を発見したポルトガルのヴァスコ・ダ・ガマが知られています。又、中国では明代に大艦隊を率いて東南アジア、インド、そしてアフリカにまで遠征した鄭和を挙げることができます。

これらの航海者によって、世界の国々がつながり、文化、経済、政治など様々な異国間の交流が始まったといえます。また、異国間の交流は、それぞれの国々を刺激し、自国を発展させる契機となったと思います。

1972年9月29日、日中両国間の国交正常化が成し遂げられ、日本の先進的な思想、多彩な文化、優れた経済システム、自由な政治の在り方などが中国に入ってくるようになりました。一方日本は長い歴史の間に、漢字をはじめ様々な中国4000年の文化や思想を吸収しています。日本と中国は、両国の交流によってお互いに大きな影響を受けています。

1972年9月29日、日中両国の国交が正常化され、日本の先進的な思想、多彩な文化、優れた経済システム、自由な政治の在り方などが中国に入ってくるようになりました。一方日本は長い歴史の間に、漢字をはじめとする様々な中国4000年の文化や思想を吸収し、両国の交流によってお

互いに大きな影響を受けています。

子どもの頃、テレビ番組で上映される日本の漫画番組などで日本という国を知り、

日本という国に関心を持つようになり、その後も、ネットや本などで日本についていろいろ調べるようになりました。その結果、調べて、日本人独自の精神構造の中核にある「大和魂」とその時代的变化に深い興味を覚えるようになったことが日本への留学を決意する動機となりました。

過去の航海家たちのように、私も日本をより深く知り、日本の方々との交流を深めて、心豊かな人間として成長し、日中の架け橋となるよう努力を続けたいと思います。なお、私は小説家を目指しています。小説家として様々な経験を積み、その経験をもとに読者に感動を与える作品を創作したいです。また、日本留学は両親の庇護から離れ、自分自身の目で社会を見、苦労はあっても独自の力で生きる貴重な体験になると確信しています。皆さん、ご支援をよろしくお願いします。



日本人が私に教えてくれたこと

国士舘大学 21世紀アジア学部4年 ^{しゅえんろ}朱晏璐 (江蘇省海門市出身)

みなさん。こんにちわ。私は朱エンロと申します。

私が話したいテーマは「日本人が私に教えてくれたこと」です。

私は今年の九月から、国士舘大学21世紀アジア学部の4年生になりました。私が日本に来てもう1年3ヶ月が経ちました。1年3ヶ月は長い人生と比べると短いかもしれませんが、しかし、この間に私が出会った人、体験したことなどいろいろな出来事から得た人生の経験は、私が生まれてからの20年間の経験の何倍もあると思います。

私の留学生活は楽しいことばかりではありませんし、つらい時もあります。しかし、どんな経験でも前向きな気持ちで受け入れようと思っています。留学生活を通して、自分の精神がかなり成長し、人生に対する考えも変わりました。留学する前のことを思い出しますと、改めて自分が日本に留学した選択は正しかったと思います。

そして、この1年3ヶ月の間、日本人の方から、いろいろなことを教えてもらいました。大学で学んだ日本に関する知識だけではなく、人生に関する考え方、日本社会のあり方、日本人の実際の生活の仕方等は、私にとって、全部自分の未来を変えるほどの体験になったと思います。

まず、最初に話したいのは、人生は本だけで知識を学ぶだけではなく、社会そのものからも早めに勉強したほうが良いということです。

私のバイト先の一人の先輩に年齢を訊いてみましたら彼はまだ18歳で、私より年下でした。それだけではなく、彼は高校生のときからすでにアルバイトをしていました。日本では、高校生がアルバイトをすることも普通なのですが、中国では高校生は一日中学校にいるのが普通です。ですから私は、彼の年齢を聞いた時はすごく驚きました。自分の18歳の頃を思い出しますと、私は毎日大学の受験勉強で学校と家の間往復し続けているだけでした。日本人の高校生活と比べてみると単純すぎて、本当の社会との接触が全然ありませんでした。今、中国の企業が人材を求めるとき、仕事の経験があるかどうかを重視しますが、中国の大学生は大学を卒業してから、はじめて仕事をするケースが多く、ほとんどの人はアルバイトの体験もありません。もし、私が中国にいたままでしたら、私も働かずに、ゆるい大学生活を過ごしたかもしれません。しかし、日本の学生はアルバイトをよくしているので、卒業して就職した時、職場に慣れるのが速いでしょう。同世代の日本人が中国人より早く大人になれる理由ではないでしょうか。私はそう考えてい

ます。

次に話したいのは自分の文化に誇りを持ち、伝統を守ることです。

日本に来て、電車の中や街中できれいな着物を着ている方をよく見かけます。見るたびに美しいと思います。そして、夏の祭には浴衣、成人式には和服というように日本人の方は自分の文化に誇りを持って伝統を守っているのではないのでしょうか。私は、国士舘大学で茶道の授業を受けています。茶道の先生が見せてくださるお手前はすごく優雅で、和の美が溢れています。国士舘大学には茶道の授業だけではなく、華道、書道、日本舞踊、日本の伝統音楽などの授業もあります。それは、日本の伝統を多くの学生に伝え、一人でも多くの学生に日本の文化の魅力を感じて貰うための、大学の努力だと私は考えています。

最後に私が話したいのは人生の計画を早めにたてることです。

国士舘大学で留学を始めた時、先ず渡されたいろいろな書類の中に進路についての調査書がありました。その時の私は、「2年後のことだ、まだわからない」というように思いましたが、今は、自分の将来をしっかりと考えるようになりました。もし、以前の私のように目の前のことだけを考えていたら自分の将来の夢も目標も見つけることはできないでしょう。人生は一步早く計画を立てれば、そして、一步早く夢に向かって努力をすれば、他(ほか)の人より一步早く夢をかなえられるでしょう。毎日自分の夢に向かって努力するのは楽しいことだと私は思います。ですから、私も自分の目標に向かって毎日努力し続けたいと思います。

では皆さん、ゆく年をさわやかに送り、輝かしい新春を迎えましょう。私のスピーチはこれで終わります。ご清聴どうもありがとうございました。



恒例！ 'わんりい' 新年会日取り決定！！

美味しいシュワンヤンロウ(羊肉のしゃぶしゃぶ)がみんなを待っている！！

🌸 2012 'わんりい' 新年会へようこそ 🌸



場所：麻生市民館・料理室(小田急線・新百合ヶ丘下車北口3分麻生総合庁舎内)

2012年2月12日(日) 11:00～14:00

- 定員：先着40名('わんりい'会員と関係者のみ。お早めにお申込下さい)
- 参加費：1500円(会場費シュワンヤンロウ材料及び福引景品購入)
- 新年会メニュー：1. ほっこり美味しい「羊肉のしゃぶしゃぶ」囲んで歓談
2. 余興 3. お笑い福引
- 申込：メール：wanli@jcom.home.ne.jp TEL/FAX：042-734-5100

【わんりいの催し】 第5回 中国語で読む・漢詩の会

- ▲日本でよく知られている漢詩を、中国語の音とリズムで楽しもう！
- ▲正しい発音で読めるように練習しよう！

✿6回目の漢詩の会は、第5回に続き杜甫の詩(Ⅱ)を予定しています。第5回に出席された方はその時にお渡しした資料をご持参ください。新規参加のかたには、第6回の講座の折に差し上げます。

✿6回目ももう一度「国破れて山河あり…」で知られた杜甫の名詩・五言律詩「春望」を、正しい発音で心情を込めて読めるように練習します。中国語を学んでいらっしやらない方も、是非ご参加を。

- 場所：まちだ中央公民館7F・音楽室2
町田市原町田6-8-1
JR横浜線町田駅ルミネ口2分/小田急線南口5分
- 期日：2011年11月6日(日)
- 時間：10:00～11:30
- 会費：1500円 ■定員：20名
*録音機をお持ちの方はご持参下さい。
- ◆お申込み&問合せ(有為楠)：☎050-1531-8622
E-mail: ukiuki65jip@yahoo.co.jp



【植田渥雄先生略歴】

- 1937年、岡山市生まれ。東京大学文学部卒業。
- ▶元桜美林大学教授
- ▶元NHKラジオ中国語講座担当講師
- ▶現桜美林大学孔子学院講師
- ▶現桜美林大学名誉教授

【'わんりい'の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報'わんりい'は、会員の皆さんの原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。

*紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

【1月の定例会】

- ◆定例会：1月27日(金) 13:30～(田井宅)
2月12日の新年会を中心に話し合います。
- ◆次回のおたよりは2012年3月号です。2月号の発行はありません。

'わんりい'の'わ'は、「和」と「輪」の'わ'です。今年も、楽しい催しで皆様にお目に掛かりましょう！

'わんりい'へ入会を歓迎します

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 'わんりい'

'わんりい'の名は、'万里'の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報'わんりい'を発行し、情報の交換に努めています。

入会されると

①年10回おたよりをお送りします。

②'わんりい'の活動の全てに参加できます。

活動の様子は、おたより又は'わんりい'HPでご覧ください。

問合せ：☎042-734-5100(事務局)

Eメール：wanli@jcom.home.ne.jp